月を見あげて

佐伯一麦

112

二人の編集者を偲ぶ会

先週末、日帰りで上京して、二人の編集者を偲ぶ会に出席してきた。会場は、吉田健一氏が贔屓にしていた店として知られる神保町のビアホール「ランチョン」。昭和五十年に、近隣の失火によって旧店舗が類焼したさいに、吉田健一氏は最後まで一人で悠然とビールを飲み干してから席を立ったという伝説がある。

二人の編集者の一人は、二〇〇一年に六十一歳で亡くなった河出書房の名物編集者だった飯田貴司さんで、この三月二日が十三回忌に当たる。一九九九年の十一月に文壇の長老作家であった八木義徳氏が長逝された折、私は告別式の司会を仰せ付かった。慣れぬことで戸惑っていると、飯田さんが、万事自分がそばについて指示をするので、それに従っていれば大丈夫だから、と仰って下さり、大船に乗ったつもりでいた。それまで飯田さんとは、直接の担当者としての付き合いはなく、もっぱら新宿の酒場での顔馴染みだった。酔うほどに、マッチ箱をマイクに見立てて歌をうたい合うという陽気な酒だった。

ところが、通夜のあと深更に及ぶ酒となった翌朝、宿酔の重い頭を振りふり、ホテルから南多摩の斎場へと向かったが、告別式が始まる時間となっても、肝心の飯田さんの姿がいっこうに見えない。仕方なく、冷や汗を掻きながらの司会となった。結局、最後まで飯田さんはあらわれず、知人たちは皆、あの葬式名人の飯田さんが、と首を傾げたものだったが、それからしばらくして飯田さんが癌になったという噂が届き、何となく納得させられることとなった。

もう一人は、やはり三月で亡くなって丸三年が経つ、元「海燕」編集長だった寺田博さんである。同じ時期に「海燕」からデビューした島田雅彦、小林恭二とともに、私も随分と寺田さんに酒場を連れ回されては薫陶を受けたものだった。「今でもまだ酒場に顔を出すと寺田さんが飲んでいるような気がするほど、亡くなっても存在感の強さは変わらない」という島田のスピーチを聞きながら、ほんとうにそうだ、と私も頷かされた。文学賞の選考会や対談があった夜などには、今でも夢に寺田さんは出てきて、「お前、ほんとうにそれでよかったのか」「お前の考え方はまだまだ甘いな」と叱咤されている気分となる。

一昨年、大佛賞に決まった司修氏の『本の魔法』は、司氏が装幀を担当して付き合いのあった埴谷雄高、武田泰淳から、やや年代が下がった古井由吉、中上健次までの十五人の作家、評論家についての生きた文学史といった内容の本だったが、そのなかにも、両人はたびたび登場しておられた。

文芸書を作るということが、著者と編集者、そして装幀家との対等な深い関わりによる共同作業であった時代に作家となった喜びを思いながら、帰途の新幹線から七夜の月を眺めた。

evening entertainment

金曜日掲載、写真も筆者